

地域の証を守る復興

岩沼市防災集団移転促進事業（玉浦西地区）、千年希望の丘――

未曾有の被害をもたらした東日本大震災からまもなく3年。土木技術者たちは現在も被災地で進められる復興事業に尽力している。学生企画として今号から3号にわたり、復興へ尽力する土木技術者の方々から、業務を通し感じておられる復興への志を学ぶ。4月号では、被災地での復興に携わった土木系学生に、その経験を伺う。今号は、岩沼市復興整備課菅原氏・菊地氏のお二人に、地域の証を守る復興の重要性を学ぶ。「地域の証を守る復興」とは？

復興計画を実現する 復興の実行部隊

岩沼市は仙台空港の南に位置し太平洋に面する。伊達政宗の命を受けて建設された運河「貞山堀（木曳堀）」を有するなど長い歴史を持つ地域だ。東北地方太平洋沖地震で発生した津波（以下、今次津波）により、市の面積の48%にあたる約29km²が浸水の被害を受けた。岩沼市では、震災から半年後の2011（平成23）年9月に「岩沼市震災復興計画マスタープラン」が策定された。現在、お二人が在籍される復興整備課はマスタープランに位置付けられたリーディングプロジェクトを実現するため、2012（平成24）年度

に新設された部署である。復興計画の実行部隊を支える土木技術者として、お二人は着任した。復興整備課の

主な業務は、災害危険区域等に指定された沿岸部の集落を内陸部に移転する「防災集団移転促進事業」、沿岸部に津波から守る丘を築造しその周囲を震災の記憶を後世に伝える公園として整備する「千年希望の丘整備事業」である。

地域のコミュニティを 継承する集団移転事業

津波により大きな被害を受けた沿岸部の6地区の集落は、人びとの居住が制限される災害危険区域等に指定されている。そのため、海岸線から約

3km内陸に位置する玉浦西地区へ移転する。移転先では、今次津波においても浸水しない、T.P. 2・0～2・5mまで盛土による高上げが行われている。玉浦西地区のまちづくりは、6

地区の代表者等で構成する「玉浦西地区まちづくり検討委員会」が中心となり、震災前のコミュニティを移転先でも継承できるように住居は6地区の集落ごとに配置し、共通の生活利便施設（商業施設等）が整備される。また、沿岸部の人びとのシンボルである「貞山堀」の線形を模した緑道（図1）を整備し、緑道を歩けばその姿を思い起こすことができるようにする。これらの計画の背景には、「震災以前のコミュニティを移転先でも継承することが地域

【語り手】

菅原 伸浩 氏

岩沼市建設部復興整備課 主幹



SUGAWARA Nobuhiro

1983年、岩沼市役所へ入所。土木課・都市計画課・下水道課・水道事業所の建設畑を中心に勤務。2012年4月より復興整備課で勤務。

菊地 智男 氏

岩沼市建設部復興整備課 主幹兼整備係長



KIKUCHI Norio

1995年、岩沼市役所へ入所。土木課・都市計画課のほか、総務部総務課での勤務も経験。2012年4月より復興整備課で勤務。

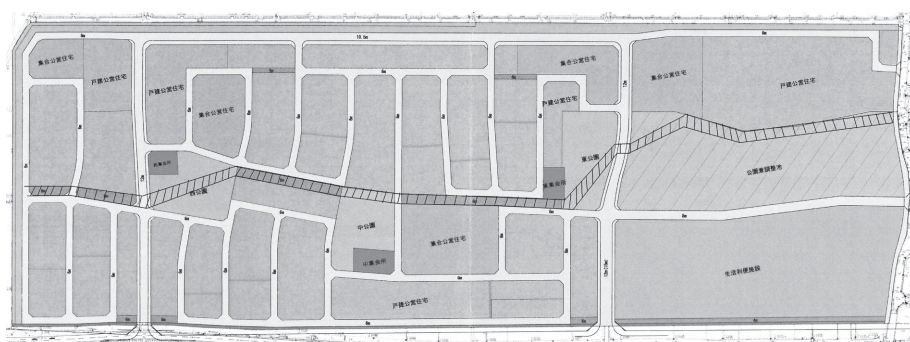


図1 移転先の土地利用計画（斜線部は「貞山堀」の線形を模した緑道）（資料提供：岩沼市復興整備課）

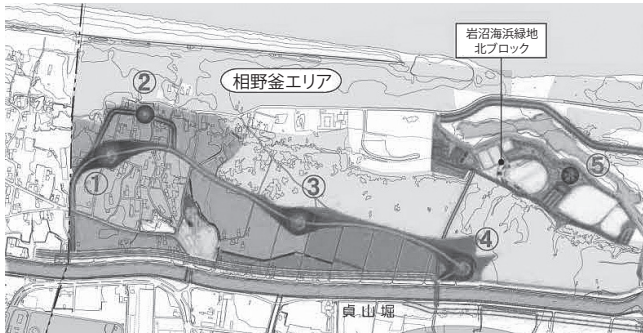


図2 「千年希望の丘」相野釜エリアの構想図(①～④は:新設される丘、⑤:3名が助かった既設の丘)(資料提供:岩沼市復興整備課)



写真1 丘からは被災前の道路配置が確認できる

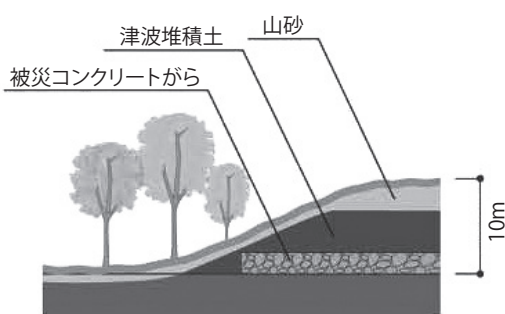


図3 丘の構造イメージ(資料提供:岩沼市復興整備課)

の再生につながる」という住民と行政の共通の思いがある。各集落のコミュニティが震災後も継承されていたため、移転先の協議やまちづくりを円滑に行うことができたという。「住民が考えたまちづくりを、住居の配置や緑道など目に見える形で提案することがわれわれの役目です」と技術者としての役割を教えていただいた。

沿岸部での生活の証を残す「千年希望の丘」

移転先の整備が進むなか、沿岸部では人々の生活の証である道路や建物の

基礎が今も残る。松島湾の島々により被害が軽減できたことをヒントに「千年希望の丘」の構想は生まれた。岩沼海浜緑地の公園内にあった丘により、3名の方の命が高さ約8mの津波から守られたことを教訓とし、津波を減衰させる目的で新たに13の丘を築造する。そして、丘をつなぐように遊歩道を整備し、沿岸部一体を散策できる公園が完成する計画だ(図2)。公園内には、津波の被害を忘れないよう、津波に耐えた蔵や建物の基礎が残される。さらに、生活道路の配置を残し、ま

民の方々は、自分たちの生活の証が残ることを喜ばれており、保存にも積極的だったという。「千年希望の丘」では、震災で発生したげれきのうち、住居の木材は園内の階段に、コンクリートがら・津波堆積土は丘の盛土材(図3)として、再生利用している。「がれきは廃棄物としてとらえられがちですが、人びとの生活の証でもあります」と語るお二人。沿岸部で生活した証を「千年希望の丘」に残すことで、まちの姿や震災の教訓を忘れないでほしいと願う強い思いを感じた。

地域・人との関わりで復興を実現する

岩沼市では一日でも早い復興を実現するために、「スピード感を持った復興」を意識している。しかし、建設資材や人員には制約があり、大規模な防災集団移転など前例のない事業でもある。「良いものを迅速に提供するために出来ることをすべて行うことが、われわれの使命です」と語る菊地さん。他の復興事業よりも早く発注を行う、工期を短縮できる施工法の採用など、土木技術者としてできる工夫を重ねたという。

「2つの復興事業には、住民の方から提案された内容がいくつもありません。住民の方々と市が協力して、地域の再生という復興の目標を達成しようとしています」と語る菅原さんからは、学生にも地域との関わりを大切にしてほしいとメッセージをいただいた。一日でも早く地域を再生するという目標を住民と技術者が共有していること。これが復興の原動力になっているのではないかと実感した取材であった。

取材・執筆

三宅 翔太、朝倉 萌子

学生編集委員